

# 順正寺報第十七号

## 永代経 御案内

記

風薫る五月、貴家皆様には御健勝にてお過ごし  
の御事と存じます。

さて、例年の通り下記により「永代経法要」  
を厳修します。

「永代経法要」とは、「私」が子供や孫をして  
子孫の幸福を願うと同じ様に、「私」に幸せで  
有って欲しいと願って下さっている御先祖に感  
謝の思いを込めてつとめる大切な行事です。

常日頃、生活の多忙さにかまけて、ついつい  
忘れていた御先祖のお陰に気付き、仏恩報謝の  
ひときを共に過ごしましょう。

萬障繰合せ御参詣下さい。

五月五日(木)午後一時より

法説経 (衆僧供養)

法話 おととき その他

⊗当山順正寺では永代経志を左記に定め、過去帳  
に記載し永代供養致しております。御希望の方は、  
住職迄お申し出下さい。

◎永代経(祥月命日説経) 金、壹拾萬円也

◎特別永代経(毎月命日説経 祥月命日特別説経)

金、参拾萬円以上

以上

壇后信徒各位殿

順正寺 住職

『私、又、おおいに、  
はびこらさせて』

頂きますすー！』

順正寺坊守 江口 久子

長き日々 通院せし我がそばに

夫は傷心を分ちおり

「江口さん、悪性ですよ。」「エッ！先生私、悪性ですか？」「ハイ。そうですね。」一瞬の間の事でした。全身が神経の塊となつて、真空状態になりました。『まさか冗談であのようなことを言われるはずがない。』と。『ウソでしょう。いや、もしかして？』もう、私自身、何がなんだか解らなくなりました。

去る二月初旬、思いがけない事に私は入院、手術を受けました。冒頭に記した事は、その折りの病棟主治医との会話での出来事でした。長い月日、毎週毎週、新宿にある東京女子医大に通院し、色々検査に検査を重ねた上で、結果的に手術となりました。私にはそれこそ長年共に過ごしてきた持病がありました。

『甲状腺』です。痛くも、痒くもない病気で、ただ、ホルモンのヴァランスが崩れるために、非常に疲れやすく、機能が低下してくると、急激に体重が減り、私の場合、どう仕様もないほどの疲労感を覚えていました。そうした中でも、今までは、多少の若さもあり、家庭の諸々の事情もあり、『とても通院できるような状況でない』と、自分で決め込んで、調子の悪い時はそれなりに過ごして参りました。が、さすがに年齢を重ねてきたこの数年間は、どうにも気力だけでは乗り切ることができなくなり、一大決心してホームドクターのご紹介で通院を始めたのです。当初は本当に単なる甲状腺の機能低下ぐらいの軽い気持ちでしたので、お薬さえ出していただけなら楽になれるものと信じておりました。しかし、わが思いとは裏腹で、検査を続ける度に余り良い結果がでず、そのうちにドクターより『手術』という言葉が出るようになりました。そうになると、自分の事を考えるより先にまず思ふのは、どれだけの入院になるのか見当も

付かぬまま、ひたすら、「家をどうしよう。私がいけないとどうにも成らない。我が家は大人パニックになる！」と。もう心は乱れに乱れ、幾度と無く医師に尋ねたのです。その都度、返ってくる言葉は、「今しないと遠からず危険な状態になる」「限りなく濃い灰色」と。それでも『癌』という言葉は出ませんでした。そんな日々の中で心身ともに疲れ果てて行ききました。内科での一応の結論が出たのが昨年暮れの二十七日。そして年が変わって、今年一月早々には外科への紹介をいただき、今度は外科へ。外科のほうでも同じ診断がくだり、いよいよ覚悟したのでした。今にして思うと、あの時、あんなにも思い悩んだことは一体なんだったのかと我ながら苦笑してます。「自分がこの家にいなくては、どうにもならない。」とばかりに、「絶対に入院も手術もしない」と意地を張り、家族を振り回していたのです。しかし、いざとなってみると何と成るものですね。二週間近くの入院でしたが戻って見たら何の不自由も無かったように

家はスムーズに回ってました。

そうしたら、気が抜けたみたいにも、「私って何んだっただのだろうか。居なくても結構ちゃんとしてるんだ。」と、自分の存在感というか、「自分は決して重要視されないのでは？」と、思い、一抹の不安を覚えたものです。

何ごとも「自分が、自分が」と思っていた、私の大きな大きな錯覚でした。決して不自由でないはずもなく、ただ、家族は緊急事態が起こると、心一つにして、お互い一生懸命それぞれの出来る範囲内で、頑張って協力してくれたのです。それを思うと、申し訳ないやら、つくづく有り難いものと、今更ながら感謝の念いで一杯です。入院中は毎日、夫や息子達が交互に見舞ってくれました。そのうえ、幼い子を置いて、娘までもが顔を出してくれました。特に娘は三人の子をパパに頼んで、来て、何くれとなく世話を焼いてくれました。こうして娘を出してくれたのは、夫である。パパの協力がなくてはできぬこと。そのことを

思うと本当に有り難くて、娘の主人に感謝するばかりです。

こうして私は退院できました。今ではお陰様で以前と異なって、同じ疲れでも少し休めば次の行動に掛かれる様に成り、嬉しいことです。「健全なる身体に、健全なる精神が宿る。」の言葉通り。本当にこれは実感です。

退院して二週間後に外来に行き、そのとき初めて執刃医でもある主治医より病状を伺いました。「癌でした。」これは一種の告知と受け止め、一瞬、『願面蒼白』となった思いが致しました。しかし先生の次の言葉によって不思議なほど冷静に受け止められました。

「悪性でなくて本当に良かったですね。この部分とこの部分を切除しました。転移はしづらいので大丈夫です。ただ正直言って、絶対に転移しないという保証はどこにもありませんので、今後のケアをきちんとしてください。隠していて不安な日々を送られるより事実を言って、これからの人生を明るく過ごされるほうが宜しいでしょう。ただし、例え

悪性でなくても癌は癌です。あなどってはいけません。」と、穏やかな表情で言ってくさいました。私自身まるでよそ事のような気で伺ってたように思われます。住職より「貴女は癌だった。悪性で無くて本当に良かった」と、退院後言われても信じようとしませんでした。したが、医師よりハッキリ言われるとさすがに信じざるを得ませんでした。それにしても、病棟の主治医に「悪性です」と告げられた時の衝撃に比べ、驚くほど冷静に受け止められました。一度は、「命が終わる」と真剣に思ったのですから、「生きとし生けるもの全てに定められた命が有る。これを定命じょうみやうと言う」と、常々住職より聞かされていても、こんなにも早く自分の命が終わるとは思ってもおらず、明日もある、次の日も、その次の日もあると確信して、希望的観測だけで今日まで来ていたのだとつくづく知らされました。

そして、一番私を恐怖せしめたはずの『死』という事に対して、以外と静かに受け止められたのは、やはり、日頃、仏法を、念仏を唱



えさせていたでいるお陰かと思えたのです。自分自身の事だけで申せば、「おまかせするより他ない。」と、覚悟したのです。

「いかなる死に様であろうとも、それだけの命をいただいできたのだ。」と、あの時ばかりは自分に言い聞かせました。

もし仏法に出会うことが出来ず生きていたら、きっと私は病を恨み、人を恨み、もう、どうにもこうにもならない状態になっていたと思います。仏法に出会え、お念仏を唱えさせていただいたこの仏縁を、ただただ有り難く感謝するのみです。

そして、こんな私なのに、身内の人々は元より、沢山の方々が励まし、力づけてくださった事が何より嬉しく、この上ない幸福せを感じ、心より感謝し、お礼を申すだけです。これから先、どれ程の命を頂いているのか知る由もありませんが、

『まだまだこの世にはびこらせて戴きます』  
家族からは、「うるさいババチャンが帰ってきた」と言わればなし。

年齢と共に、益々、口だけが元気になって困ります。それでも大袈裟なようですが一度は死を覚悟した身。以来、自分でも信じられないほど心が晴れやかで、「来るなら来い！受けて立ちましょう！」という気になっております。どんなに生きても三十年有るか無しかの命です。いずれはサヨナラが必ず来るのです。それなら命ある限り精一杯生き、

「私の人生、それなりに素敵だった！」と、思えるような生き方ができたら良いなと思ひ、そのように心掛けたいと一人想うこの頃です。最後に沢山の方々よりの心温まるお見舞いを有り難うございました。勝手ながらこの時報の紙面より厚く御礼申し上げます。

わが夫つまの七光とも思う日々

花一杯の春の病室 久子

△口 当手

あの大雪が降った頃は入院中でした。

外は冬の最中なのに、

花一杯の病室は春でした。

これこそはと信じられるものがこの世にあるだろうか  
信じられるものがあつたとしても信じない素振り

(吉田拓朗『イメージの詩』より)

この詩は、吉田拓朗というフォーク・ソング歌手  
の歌っている歌の一節です。

我々は日々の暮らしの中で何かしら常に信じれる  
ものを求めて彷徨っているのではないのでしょうか。  
それが、物質であつたり、地位であつたり、金であ  
つたり、その求める物の形態は種種様々であります。  
しかし、そこに最終的に求めているものは『安心』  
と言うものではないでしょうか。

「これこそ私の求めていたものだ。」というもの  
をやっと手にいれることができる。しかし、そこで  
満足できず、新たな物を求め出すことが多い様で  
す。自分に当てはめてみる。何故こうも次から次へ  
と欲求が出てくるのであろうか。どうもそこには、  
『不安』というものがかならず絡んでいるように思  
えるのです。物質だの金だのというものは必ず消滅  
していくものである。だから一つ手にいれると、よ  
り多くのものを求めて、少しくらい無くなつても大  
丈夫だというよな状況に身を置きたく成るのです。

口では、頭ではそんな所には『安心』はないなどと  
いつておつても、実際問題として、生活を考えると  
そんな綺麗事では済まないものです。お金や物によ  
る『保証』を求めてしまっているのでしょうか。

かといつて、これじゃ、余りにも寂しい考え方で  
すよね。だって、『お金や物質に安心を求めても、  
そこには新たな不安が有るだけであり、本当の安  
心などない。』という事は、本当は『綺麗事』な  
んかではなく、あたりまえのことなのですから。

『安心』とは心の問題です。だからそれを形とし  
て求めていること事態が筋違いなのでしょう。形あ  
る物を通して、形のない、掴み所のない『心』とい  
うものを見据えて行くことが、本来、取つて行くの  
に一番解りやすい方法であると思ひます。それぐら  
い、本当は皆解っている事なのに、実際、毎日の生  
活の中で、何等かの強迫観念に押しやられて、知ら  
ず知らずのうちに本末転倒して、形で『心の置き処』  
を現そうと必死になつてしまふのでしよう。

今、一番考えなければいけない事、よくよく見な  
ければならないこと、それは、自分にも形でない  
『心の置き処』が、きつとあるという事実と、それ  
を信じられるかどうかではないのでしょうか。

さて、『これこそはと信じれるものがこの世にあるだろうか』と言う事ですが、そう問われると、何よりも先に浮かんでくる答えは、多くの場合『愛情』というものではないでしょうか。しかし、この『愛情』というもののほど厄介な物はない。形が無く、これこそが、こういう物が『愛情』であるというようなマニユアルがあるわけでも無い。自分が思っているそれと他人の考えているそれが少しでも食い違ってくる、段々お互いの間に歪みが生じてきてしまい、ともすると、收拾が付かなくなり、かえって、お互いの関係がどんどん悪くなっていってしまう。そんなことってまま有りますよね。別にどっちが悪いというわけでもないのですが、相手が自分のことを真剣に思ってくれているからこそ、自然に掛けてくれている思いであるのに、そんな事百も承知であるのに、そのことを考えれば考えるほど突き当たり、本当はあるか無いかも定かでない心の歪みに陥って行く自分が見える。素直に、うけとめられたらどんなにかいいのだろうかと思ひ悩み、自分に閉じ籠っていってしまう。がんじがらめの自分がいるのです。こうして、思っていることを文字にして、読み返してみると、ほんと、バカですよねぇ。要は、一つ

も自分の考えから出ることができず、勝手に「俺は孤独なんだぁ」と言っ、自分に酔っている、どこかの三文詩人みたいで、何か気持ち悪いですね。こういう奴ってというのが私としては一番嫌いなタイプの人間でして、いやだなぁ。といっても、自然とこういう文章が出てくるという事は、自分の中にそうしたイヤな部分が存在する事の証拠でしょうから、あえて、書き直さずに載せときます。

元に戻します。信じると言う事は、その裏に常に『もしかしたら』というものをともなってしまうがちのようです。そう、『私はあるの人を信じております。でも、もしかしたら・・・』てなぐあいに。そして、その信じる心が強ければ強いほど、裏切られた時には、憎しみもより強くなりがちのようです。それゆえに、信じることを恐れてしまいがちになり、信じられなくなり、心が何も見えなく、いや、見ようとしなくなってしまうのでしょうか。『信じれるものがあつたとしても、信じない素振り』をしてしまうのです。本当は信じたいのに。

ただ、本当にそれが解っているのかどうか問題なのです。頭では「俺ってそうなんだ」と考えていても、実際問題として、本当に心でそう(次ページ)

感じているかどうか、そのところがどうも怪しい。たんに『きどっている』だけなのではないかと思えてならない。現に、ここではこんな事考えているが、いつもは、そんな事考えているわけでない。ましてや、『物欲と愛情と信心』についてなど考える事などたまにしかない。又、拓朗の歌が聞こえて来る。

気取った仕草がしたかったあんな

鏡を見てごらん

気取ったあんなが写ってるじゃないか

あんなは立派な人さ (イメージの詩より)

何気なく思うままに書き綴ってみたが、余計解らなくなってきた。親鸞の言葉が、珍しく思い浮かぶ。

『親鸞におきてては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと(法然)のおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。(中略)』

たとひ法然上人にすかされまひらせて(騙されて)、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候う。(中略) いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定済みかぞかし。』(軟異抄)

全文載せられなかったのが残念ですが、親鸞のこの『地獄に落ちて何も後悔するわけがない』という宣言に信心を得た時のたくましさを感じます。

『白色白光の会』御案内  
五月の『白色白光の会』は、左記の通り執り行ないます。

記

日時・五月十日(火)

午後一時ヨリ

△会処・順正寺

尚、会では、随時会員を募集しております。

詳しくは、当寺までお問い合わせ下さい。

五月に従弟が結婚する。自分にとっては弟のような存在である。最近では自分よりしっかりしているようにも思える。しかし、親から見るとどうも頼り無い所がまだまだ有るようです。きっとそういう物なのでしょう。親からすれば、幾つになろうと、どんなに偉くなろうと子供は子供。心配は尽きない物でしょう。自分にしてもきっとそうでしょう。

未だに私が彼のことを弟のように思えるという事は、彼が今も変わりなく自分のことを慕ってくれているお陰だと思ふ。又、こうして思い出させて貰える機会をも与えられた事にも感謝してる。そうでもないと感じることもできない自分に、感ずる機会をも与えてくれたことが、また嬉しい。

● 177 東京都練馬区石神井町3の17の4

電話 03 (3996) 2064

FAX 03 (3997) 8117

順正寺